

銅・鉄・ガラスなどの製品が加わる。また、銀製・青銅製・貝製・鹿角製などの指輪や、木製の履も発見されている。

中国からもたらされた権力の象徴となる道具としては、天明四年（二七八四）福岡県志賀島で発見された「漢委奴国王」銘の金印が、紀元五七七年に後漢の光武帝から奴国王に与えられたものとされている。また、福岡県前原市三雲南小路遺跡から出土したガラス製の璧も中国では一定の身分の象徴である。

三 集落と墓地

弥生時代には水稲耕作を生活の基盤としていたことから、沖積平野や河川の後背湿地などの農業用水の得やすい場所は水田に利用された。このため、集落は水田の周辺の微高地や低丘陵に広がる場合が一般的である。また、墓地も、集落に近い同様の地形上に営まれることが多かった。

住居

一般的な住居は竪穴住居で、床面の形は全国的に前期・中期には円形ものが多く、後期になると大部分が方形になる。住居内の中央部には炉が作られ、柱は床面が円形の場合には円形に一〇本程度めぐらされ、方形住居では炉を挟んで二本、または方形に四本以上配置される。屋根は切妻造りか円形に近い寄棟造り、あるいは原始的な入母屋造りなど各種あり、茅葺きのものが多い。

また、掘立柱建物も一般の住居として使用され、湿気が多い土地や作業小屋などに多くみられたが、しだいに神聖な空間、特別の人々の住居となっていくた。

第3章 弥生時代

倉庫

食料を貯蔵するための倉庫は、地面を掘りくぼめた貯蔵穴と高床倉庫とがある。貯蔵穴は、地表面に比べて底の床面が広がる形態の、いわゆる袋状の竪穴である。床面は円形と方形とがあり、大きさは一〜二メートルのものが多し。貯蔵方法は粃もみや稲穂をそのまま積んでいる場合が多いが、粃もみなどを壺や甕などの土器に入れて置くこともあった。

高床倉庫（第9図）はアジア東南部に多く見られる建築様式で、既に縄文時代中期から存在するが、弥生時代になって米倉として建築されるようになった。建物の規模は一般的に梁間はりまが一間で、桁行けたぎが一〜三間のものが多い。

集落内にはこれらの住居や倉庫以外に、井戸や土器を焼く場所などが設置される場合がある。

集落

集落の形態は、そこに生活する集団の内容や立地環境によっても異なる



第9図 高床倉庫（佐賀県吉野ヶ里遺跡での復原）

とともに、時期によっても変化する。

前期前半には一地域の中に幾つかの小集落が散在するが、前期後半から中期にはそのなかで半径数百メートル規模の拠点集落が出現してくる。拠点集落と周辺集落とは水田経営などの生産活動を通して密接に結び付き、人口の増加や生産地の拡大に伴いこの集団から一ないし数家族が出て、新しい集落が作られる。

環濠集落は福岡市板付遺跡のように前期初頭からみられるが、前期後半から中期にかけて佐賀県吉野ヶ里遺跡や甘木市平塚川添遺跡のような拠点集落を中心に、環濠を何重にもめぐらすものが増加してくる。これは後述するように、集団間や地域間の安定した状況がしだいに変化していったことと関係している。

西日本の特に瀬戸内沿岸から近畿で中期中ごろから後期にかけて多く発見されている集落に高地性集落がある。高地性集落は香川県紫雲山遺跡に代表されるように、平地から数十メートル以上の高い丘陵や山の上に営まれる比較的小規模の集落で、軍事的・防衛的役割を果たす見張りおよび通信施設と考えられている。

中期後半から後期の環濠集落や高地性集落は当時の社会的な緊張状態や争乱が生みだした集落である。

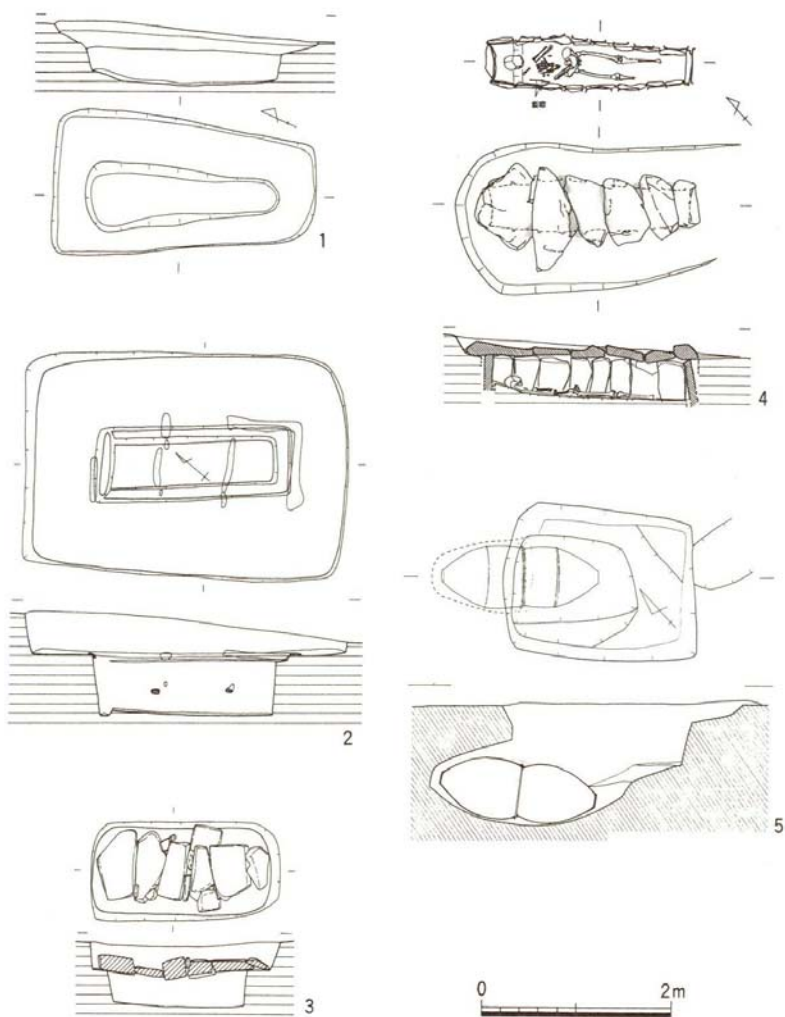
各種の埋葬施設

弥生時代の埋葬施設には、土壙墓・木棺墓・石蓋土壙墓・箱式石棺墓・甕棺墓などがある(第10図参照)が、墓地内でのその構成は地域色がある。

土壙墓(1)や木棺墓(2)は、各地で普遍的に営まれる埋葬施設である。土壙墓は地面を素掘りした埋葬施設であり、木棺墓は西日本で新しく始まった埋葬法で、素掘りの土壙の中に木板を組み合わせた箱形の棺を埋納するものである。西日本では後期になると有力者の墓を中心に割竹形木棺も登場する。

石蓋土壙墓(3)・箱式石棺墓(4)は、九州から山口県地域で前期からみられる。石蓋土壙墓は土壙墓

第3章 弥生時代



第10図 弥生時代の各種埋葬施設

- 1 土壙墓 2 木棺墓 3 石蓋土壙墓 4 石棺墓 5 甕棺墓

に板状の石で蓋をした棺で、箱式石棺墓は蓋と四周の壁面に石を並べて棺とするものである。

土器を埋葬施設として使用する風習は縄文時代からあるが、弥生時代になると高さ一メートルを超す大形の甕を単独または二個組み合わせさせて棺とする、甕棺墓(5)が北部九州で前期から盛んに営まれる。

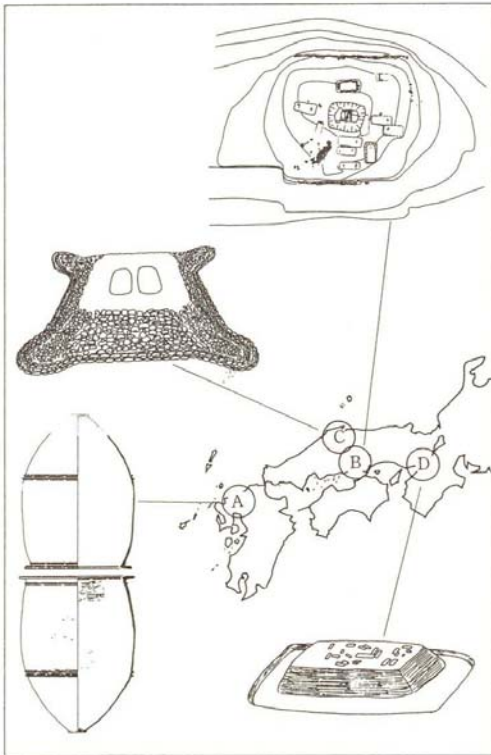
墓地の構造と変遷

などが多い。

このような各種の埋葬施設は、集落から離れた場所に集中して営まれ、共同墓地を形成する。その場所は、生産地(水田)と居住地(集落)の周辺部にある微高地や丘陵上

共同墓地内での各埋葬施設の配置は、地形に左右されるため一般的に丘陵上部の平坦面などでは列をなして規則的に並ぶ場合が多い。そして、個々の埋葬に伴う祭祀に使用された土器などを廃棄するための土壇が周縁部に掘られている。ただし、乳幼児については集落内に個別に葬られる場合も多い。

中期・後期を通じて各地で強



第11図 弥生時代の各地の首長墓

(酒井龍一「王墓の出現」『古代史復元4』より)

力な集落により地域内の集落の統合が進む。こうした統合を進めた集落の中の特定の血縁関係にある一族は、その地域社会全体の支配者である首長層となる。首長層は当初共同墓地内に一緒に葬られていたが、しだいに共同墓地外に独自の墓地を営むようになる。更にこの状況が進展して、後期後半には地域によっては特定個人墓も作られる。北部九州では中期前半からこの動きが始まり、後半になると甕棺墓に前漢鏡や玉類をはじめとする多数の副葬品を持つものが現れる。更に、後期後半には溝で区画した方形周溝墓が造られる。瀬戸内の吉備地方では、中期後半から台状墓や墳丘墓と呼ばれる盛り土を持つ特定集団墓が現れる。日本海沿岸の出雲地方では後期に、四隅突出型の墳丘墓が造られ、近畿中央部でも中期から、方形周溝墓が営まれる。このように、首長層の墓地も各地方でそれぞれ個性的な形態になる（第11図参照）。

生産地（水田）の拡大 弥生時代の水田は、地形の特徴や水稲耕作の技術水準によって、湿田・半湿田・半乾田などに分けられ、水田の開発は、北部九州では縄文時代晩期末に自然堤防・谷底平野や洪積台地の縁辺部で進み、弥生時代前期には扇状地末端部や三角州の一部も開発される。中期になると耕作具に鉄器が普及し始め、水田の拡大に拍車がかかる。岡山県津島遺跡では湿田・半湿田に加えて、半乾田が自然堤防上に開発される。ただし、全国的に洪積台地や三角州が大規模に開発されるのは古墳時代以降である。

四 クニの発生と展開

縄文時代には大きな集団が長期間にわたって定住した集落が、既に各地に営まれていたが、狩猟・採集を